

賣色鴨南蛮

泉鏡花作

一

はじめ、目に着いたのは――些と申兼ねるが、
――とに角、緋縮緬であつた。其の燃立つやう
なのに、朱で處々ぼかしの入つた長襦袢で。女は裾
を端折つて居たのではない、褌を高々と掲げて、膝
で挟んだあたりから、紅がしつとり垂れて、白い
足くびを絡つたが、何うやら濡しよびれた不氣味さ
に、然うして引上げたものらしい。素足に染まつて、
其の紅いのが映りさうなのに、藤色の緒の重い厚ぼ
つたい駒下駄、泥まみれなのを、弱々と内端に揃へ
て、股を一つ擦つた姿で、降りきる雨の待合所の片
隅に、腰を掛けて居たのである。

日永の頃ゆゑ、まだ暮かゝるまでもないが、やが
て五時過ぎた。場所は院線電車の萬世橋の停車場
の、あの高い待合所であつた。

柳はほんのりと萌え、花はふつくりと蒼むだ、昨日今日、緑、紅、霞の紫、春の將に闌ならむとする氣を籠めて、色の濃く、力の強いほど、五月雨か何ぞのやうな雨の灰汁に包まれては、景色も人も、神田川の小舟さへ、皆黒い中に、紅梅とも、緋桃とも言ふまい、横しぶきに、血の滴る如き紅木瓜の、濡れつゝばつと咲いた風情は、見向ふものゝ、面のほてるばかり目覺しい。・・・・・

此の目覺しいのを見て、話の主人公と成つたのは、大學病院の内科に勤むる、學問と、手腕を世に知らるゝ、最近留學して歸朝した秦宗吉氏である。

邊幅を修めない、質素な人の、住居が芝の高輪にあるので、毎日病院へ通ふのに、此の院線を使つて、お茶の水で下車して、あれから大學の所在地まで徒歩するのが習であつたが、五日も七日も斯う降續くと、何處の道も宛然泥海のやうであるから、勤人が大路の往還の、茶なり黒なり背廣で靴は、まつたく大袈裟だけれど、狸が土舟と言ふ體がある。秦氏も御多分に洩れず――尤も色が白くて鼻筋の通つ

た處は寧ろ兎の部に屬しては居るが——步行惱むで、今日は本郷どほりの電車を萬世橋で下りて、例の、銅像を横に、大な煉瓦を潛つて、高い石段を昇つた。……此だと、一寸歩行いたゞけで甲武線は東京の大中央を突抜けて、一息に品川へ

が、其は段取だけの事サ。時間が時間だし、雨は降る……此處も出入が嘸ぞ籠むだらう、と思つたよりは夥しい混雜で、唯停車場など、宿場がつて濟しては居られぬ。川留か、火事のやうに湧立ち揉合ふ群衆の黒山。中野行を待つ右側も、品川の左側も、二重三重に人垣を造つて、線路の上まで押覆さる。

……すぐに電車が來た處で、何うせ一度では乘れはしまい。

宗吉は然う斷念めて、洋傘の雫を切つて、軽く黒外套の脇に挟みながら、薄い皮の手袋をスツと手首へ扱いて、割合に透いて見える、何故か、硝子圍の温室のやうな氣のする、雨氣と人の香の、むつと籠

つた待合の裡へ、コツ／＼と　　矢張泥に成つ
た　　侘い靴の尖を刻むで入つた時、ふと其の
目覺しい處を見たのである。

たしか、中央の臺に、まだ大な箱火鉢が出て居
た　　其處で、八々と打撞つた、其の縮緬
の炎から、急に瞳を傍へ外らして、横状にプラツト
フォームへ出ようとすると、戸口の柱に、ボンと出
た、も一つ赤いもの。

威おどしては不可いけない。何なに、黒山くろやまの中なかの赤帽あかぼうで、其處そこに腕組うでぐみをしつゝ、うしろ向きむに凭掛もたれかつて居ゐたが、宗吉そうきちが顔かほを出だしたのを、茶色ちやいろのちよんぼり髯ひげを生はやした小こ白しろい横顔よこがほで、じろりと撓ためると、

「上のぼりは停電ていでん……下くだりは故障こしやうです。」

と、人ひとの顔かほさへ見みれば、返事へんじは斯かう言いふものと極きめたやうに殆ほとんど機械きかい的に言いつた。そして頸窪ぼんのくぼを其その凭掛もたれかつた柱はしらで小突こづいて、超然てうぜんとした。

「へッ！ 上のぼりは停電ていでん。」

「下くだりは故障こしやうだ。」 響ひびの應おうずるが如ごとく、四五人にん口々くちくちに饒舌しやえつた。

「あゝ、あゝ、」

「堪たまらねえなあ。」

「よく出で來きてら。」

「困こまつたわねえ。」 と、つい釣込つりこまれたかして、連つれもない女學生ぢやがくせいが猪首みくびを縮ちぢめて呶つぶやいた。

が、いづれも、今いまはじめて知しつたのでは無なさうで、赤帽あかぼうが爾しかく機き械かい的に言いふのでも分わかる。

恚かる群集ぐんじゆの動搖どうよむ下したに、冷然れいぜんたる線路せんろは、日脚ひあしに

薄暗く沈んで、いまに鯨が釣れるから待て、と大都市の泥海に、入江の如く彎曲しつゝ、伸々と静まり返つて、其の瘴底光のする齒の土手を見せて、冷笑ふ。

赤帽の言葉を善意に解するにつけても、苟も中山高帽を冠つて、外套も服も身に添つた、洋行がへりの大學教授が、端近へ押出して、其際じたばた爲べきではあるまい。

宗吉は――煙草は喫まないが――其の火鉢の傍へ引籠らうとして、靴を返しながら、爪尖を見れば、ぐしよ濡の土間に、ちら／＼と又紅の襪が流れる。

緋鯉が躍つたやうである。

思はず視線の向ふのと、肩を合せて、爾時、腰掛を立上つた、もう一人の女がある。丁度緋縮緬のと並んで居た、其のつれかとも思はれる、大島の羽織を着た、丸髻の、脊の高い、面長な、目鼻立のきつぱりした顔を見ると、宗吉は、あつと思つた。

再び、おや、と思つた。

と言ふのは、頃日忙しさに、不沙汰はして居るが、知己も知己、然も其の婚禮の席に列つた、従弟の細君にそつくりで。世馴れた人間だと、すぐに、「おゝ。」と聲を掛けるほど、よく似て居る。が其の似て居るのを驚いたのでななければ、思ひ掛けず出會つたのを驚いたのでない。まさしく其の人と思ふのが、近々と顔を會はせながら、すつと外らして窓から雨の空を視た、取つても附けない、赤の他人らしい處置振に、一驚を吃したのである。

いや、全く他人に違ひない。

けれども、脊恰好から、形容、生際の少し亂れた處、色白な容色よしで、淺黄の手柄が、如何にも似合ふ細君だが、此の女も又不思議に淺黄の手柄で、鬢の色つばい處から………それ／＼、少し仰向いて居る顔つき。他人が、一寸眉を顰める工合は、其の細君は小鼻から口元に皺を寄せる癖がある。………其までが、其のまゝで、電車を待つ。草臥れて、雨に侘しげな様子が、小鼻に寄せた皺に

あからさま
明白であつた。

もろろん 別人とは納得しながら、うつかり口に出さ
うな挨拶を、唇で噛止めて、心着くと、いつの間に
か、足もやゝ近づいて、帽子に手を掛けて居た極の
悪さに、背を向けて立直ると、雲低く、下谷、神田
の屋根一面、雨も霞も漲つて濁つた裡に、神田明神
の森が見える。

と 唯、緋縮緬の女が、同じ方を凝と視て居た。

三

はな 鼻の隆い其の顔が、ひた／＼と横に寄つて、
むね 胸に

白粉おしろいの著つくやうに思おもつた。

宗吉そうきちは、愕然がくぜんとするまで、再びふたたび、似にた人の面影おもかげを其その女をんなに發見みいだしたのである。

緋縮緬ひぢりめんの女をんなは、櫛卷くしまきに結ゆつて、黒縮緬くろぢりめんの紋着もんつきの羽は織りを撫肩なでがたにぞろりと着きて、瘦やせた片手かたてを、力ちからのない襟えりに插さして、然さうやつて、引上ひきあげた褌つまを壓おさへるやうに、膝ひざに置おいた手に萌黄色もえぎいろのオペラバツグを大事だいじさうに持もつて居ゐる。最もう三十いくを幾いくつも越こした年とし紀しごろから思おもふと、小兒こどもの土産みやげにする玩弄品おもちゃらしい、粗末そまつな手提てさげを、大事だいじさうに、持もつて居ゐるは、きものも、襦袢じゆばんも、素足すあしも、櫛卷くしまきも、紋着もんつきも、何なんとなくちぐはぐな處ところへ、色白いろしろさうなのが濃こい化粧けしやう、口くちの大きおほく見みえるまで濡々ぬれぬれと紅べにをさして、細ほそい頸えりの、眞白ましろな咽喉のどを長ながく、明神みやうじんの森もりの遠見とほみに、伸上のびあがるやうな、ぐつと仰向あをむいて、大きおほな目めを凝ぢつと二みつた顔かほは、首丈くびたけ活人いきにんぎ形やうを繼ついだやうで、綺麗きれいなよりは、もの凄すこい、但たゞ、美うつくしく優やさしく、然しかもきりゝとしたのは類たぐひなき其その眉まゆである。

眉まゆは、宗吉そうきちの思おもふ、忘れぬ女をんなと寸分すんぶん違ちがはぬ。が、

此の似たのは、もう一人の圓鬚の方が、從弟の細君に似たほど、適格したものでは決してない、或は其が餘りよく似たのに引込まれて、心に刻んだ面影が緋縮緬の方に宿つたのであらうも知れぬ。

よし、眉の姿、唯一枚でも、秦宗吉の胸は、夢に三日月を呑んだやうに、晁乎と尊く輝いて、時めいて躍つたのである。

——お千と言つた、其の女は、實に宗吉が十七の年紀の生命の親である。——

然も場所は、面前彼處に望む、神田明神の春の夜の境内であつた。

「あゝ……もう一呼吸で、剃刀で、・

と、今視めても身の毛が悚立つ。……森のめぐりの雨雲は、陰惨な鼠色の隈を取つた可憐い面のやうで、家々の棟は、瓦の牙を噛み、齒を重ねた、其の上に二處、三處赤煉瓦の軒と、亞鉛屋根の引剥が、高い空に、赫と赤い齒莖を剥いた、人を啖

ふ鬼の口に髣髴する。……其の森、其の樹立は、……春雨の煙るとばかり見る目には、三ツ五ツ縦に並べた薄紫の眉刷毛であらう。死なうとした身の、其の時を思へば、其も逆に生えた蓬々の髣髴である。

其の空へ、すら／＼と雁のやうに浮く、緋縮緬の女の眉よ！ 瞳も据つて、瞬きもしないで、恍惚と同じ處を凝視めて居るのを、宗吉は又ちらりと見た。

あゝ其の女？

と波を打つて轟く胸に、此の停車場は、大なる船の甲板の廻るやうに、舳を明神の森に向けた。手に取るばかり尚ほ近い。

「なぞへに低く成つた、彼處が明神坂だな。」

其の右側の露路の突當りの家で。

—— 死なうとした日の朝 —— 宗吉は、年紀

上の渠の友達に、顔を剃つて貰つた。・・・・
其の夜、明神の境内でアハヤ咽喉に擬したのは其の
剃刀であるが。

(一寸順序を附よう。)

宗吉は學資もなしに、無鐵砲に國を出て、行處の
なさに、其の頃、或一團の、取止めのない不體裁な
其の日ぐらしの人たちの世話に成つて、辛うじて雨
露を凌いで居た。

其人たちと言ふのは、主に懶惰、放蕩のため、世
に見棄てられた醫學生の落第なかまで、年輩も相應、
女房持なども交つた。中には政治家の半端もある
し、實業家の下積、山師も居たし、眞面目に巡査に
成らうかと言ふのもあつた。

其處で、宗吉が當時寢泊りをして居たのは、同じ
明神坂の片側長屋の一軒で、こゝには食ふや食は
ずの醫學生あがりの、松田と云ふのが夫婦で居た。

其の突當りの、柳の樹に、軒燈の掛つた見晴のいゝ
誰かの妾宅の貸間に居た、露の垂れさうな綺麗なの
が……こゝに緋縮緬の女が似たと思ふ、其
のお千さんである。

四

お千は、世を忍び、人目を憚る女であつた。宗吉
が世話になる、渠等なかまの、殆ど首領とも言ふ
べき、熊澤と言ふ、追て大實業家と成ると聞いた、
繪に描いた化地藏のやうな大漢が、そんじよ其の邊
のを落籍したとは表向、得心させて、連出して、内
證で圍つて居たのであるから。

言ふまでもなく商賣人だけれど、藝妓だか、遊女
だか——其は今に於て分らない——何しろ、
宗吉には三ツ四ツ、もつとかと思ふ年紀上の綺麗な
姉さん、婀娜なお千さんだつたのである。

前夜まで——唯今のやうな、じと／＼降の雨
だつたのが、花の開くやうに霽つた、彼岸前の日曜
の朝、宗吉は朝飯前……と言ふが、やがて、
十時……此處は、ひもじい経験のない讀者にも御推讀を願つて置く。が、いつに成つても其の朝の御飯はなかつた。

妾宅では、前の晩、宵に一度、てんどんのお詠へ、
夜中一時頃に蕎麥の出前が、芬と枕頭を匂つて露路
を入つたことを知つて居るので、行けば何かあるだ
らう……天氣が可いと尚ほ食べたい。空腹
を抱いて、げつそりと落込むやうに、溝の減つた裏
長屋の格子戸を開けた處へ、突當りの妾宅の柳の下
から、ぞろ／＼と長閑さうに三人出た。

肩幅の廣いのが、薄汚れた黄八丈の書生羽織を、

ぞろりと着たのは、此の長屋の主人で。一度戸口へ引込むだ宗吉を横目で見ると、小指を出して、

「何うした。」

と小聲で言った。

「まだ、お寝つてゝす。」

起きるのに張合がなくて、細君の、まだ裸體で柏餅に包まつて居るのを、然う言ふと、主人は一寸舌を出して黙つて行く。

次のは、剃りたての頭の青々とした綺麗な出家。細面の色の白のが、鼠の法衣下の上へ、黒縮緬の五紋、――お干さんのだ、振の紅い――羽織を着て居た。昨夜、此の露路に入つた時は、紫の輪袈裟を雲の如く尊く絡つて、水晶の數珠を提げたのに。――

唯、うしろから、拳固で、前の圓い頭をコツンと敲く眞似して、宗吉を流眊で、ニヤリとして續いたのは、頭毛の眞中に皿に似た禿のある、色の黒い、目の窪んだ、口の大な男で、近頃まで政治家だつたが、翻つて商業に志した、ために紋着を脱いで、

綿銘仙の羽織を桁短に、めりやすの股引を瘦股に穿いて居る。・・・小皿の平四郎。

いづれも、花骨牌で徹夜の今、明神 坂の常盤湯へ行つたのである。

行違ひに、茫乎と、宗吉が妾宅へ入ると、食ふ物どころか、いきなり跡始末の掃除をさせられた。

「濟まないことね、學生さんに働かしちやあ。」
とお千さんは、伊達巻一つの艶な蹴出しで、お召の重衣の襖をぞろりと引いて、黒天鵝絨の座蒲團を
持つて、火鉢の前を遁げながら然う言つた。

「何、目下は私たちの小僧です。」
と、甘谷と言ふ横肥り、でぶ／＼と脊の低い、ばらりと髪を長くした、太鼓腹に角帯を巻いて、前掛の眞田をちよきんと結んだ、此も醫學の落第生。追つて大實業家たらんとする準備中のが、笑ひながら言つたのである。

二人が、此の妾宅の貸ぬしのお妾 ー が、最も
ういゝ加減な中婆さん ー と兼帯に使ふ、次の

室へ立つた間に、宗吉が、ひよろ／＼して、時々淺
ましく下腹をぐつと泣かせながら、兎に角、きれいに掃出すと、

「御苦労々々。」

と、調子づいて、

「さあ、貴女。」

と、甘谷が座蒲團を引摺つて、もとの處へ。．．
．．．．．身體に似ない腰の軽い男。．．．．．尤
も甘谷も、つい十日ばかり前までは、宗吉と同じ
長屋に貸蒲團の一ツ夜着で、芋蟲ごろ／＼して居た
處——事業の運動に外出勝の熊澤旦那が、お千
さんの見張兼番人かた／＼妾宅の方へ引取つて置く
のであるから、日蔭ものでもお千は御主人。此のく
らゐな事は當然で。

對の蒲團を、とん／＼と小形の長火鉢の内側へ直
して、

「さ、さ、貴女。」

と自分は退いて、

「いざ先づ．．．．．此へ。」と口も氣もと

もに軽い、が、起居が石臼を引摺るやうに、どし／

ゝする。―― あゝ、無理はない、脚氣がある。
夜あかしはしても、朝湯には行けないのである。

「可厭ですことねえ。」

と、婀娜な目で、襖際から覗くやうに、友染の裾を曳いた櫛卷の立姿。

五

櫻には些と早い、木瓜か、何やら、枝ながら障子に映る花の影に、ほんのりと日南の薫が添つて、お千がもとの座に着いた。

向うには、旦那の熊澤が、上下大島の金鎖、あの

大々したので、ドカリと胡坐を組むのであらう。

「お留守ですか。」

宗吉が何となく甘谷に言つた。此處にも見えず、湯に行つた中にも居なかつた。其の熊澤を訊いたのである。

縁側の片隅で、

「えへん！」と屋鳴りのするやうな咳拂を響かせた、便所の裡で。

「熊澤は此處に居るぞう。」

「まあ、」

「随分ですこと、ほゝゝ。」

と家主のお妾が、次の室を臺所へ通がゝりに笑つて行くと、お千さんが俯向いて、莞爾して、

「餘り色氣かなさ過ぎるわ。」

「其處が御婦人の毒でげす。」

と甘谷は前掛をボン／＼と敲いて、

「お千さんは大將の彼處ン處へ落ツこちたんだ。」

「あら、随分……酷いぢやありませんか、

甘谷さん、餘りだよ。」

何にも知らない宗吉にも、此の間違は直ぐ分つた、

汚きたないに相違さうあない。

「いやあ、此これは、失敗しつぱい、失敬しつけい、失禮しつれい。」

と甘谷あまやは立続たてつゞけに叩頭おじぎをして、

「其處そこで、おわびに、一つ貴女あなたの顔かほを剃あらして頂いたきやせう。いえ、自慢じまんぢやありませんがね、昨夜ゆうべから申まをす通り、野郎やろう圖體づうたいは不器用ぶきようでも、勝奴かつやつこぐらゐにや確たしかに使つかへます。剃刀かみそりを持もたしちや確たしかです。――秦君はたくん、一寸奥ちよつとおくへ行いつて、剃刀かみそりを借かりて來給きたまへ。」

宗吉そうきちは、お千せんさんの、湯ゆにだけは密そつと行いつても、床屋とこやへは行ゆけもせず、呼よぶのも憤つしむべき境遇きやうぐうを領うなきながら、お妾めかけに剃刀かみそりを借かりて戻もどる。

「おつと！………次手ついでに金盞かなだらひ………氣きを利きかして、氣きを利きかして。」

此この間に、いま何なにか話はなしがあつたと見みえる。

「さあ、君きみ、此處こゝへ顔かほを出だしたり、一つ手際てぎはを御ご覽らんに入いれないぢや、奥おくさん御信用ごしんよう下くださらない。」

「いゝえ、然うぢやありませんけれどもね、私まだ、そんなでもないんですから。」

「何、御遠慮にや及びません。間違つた處でたかゞ小僧の顔でさ。……丁度、ほら、むく毛が生えて、餡子の撮食をしたやうだ。」

宗吉は、可憐やゴクリと唾を呑んだ。

「仰向いて、ぐつと。そら、何うです、つる／＼のつる／＼と、鮮かなもんでげせう。」

「何だか危ツかしいわね。」

と少し膝を浮かしながら、手元を覗いて憂慮しさに、動かす顔が、鐵瓶の湯氣の陽炎に薄絹を掛けつゝ、宗吉の目に、ちら／＼、ちら／＼。

「大丈夫、それ此の通り、一寸一寸の一寸一寸と、」

「あれ、止して頂戴、止してよ。」

と浮かした膝を揺ら／＼と、袖が薰つて伸上る。

「何故ですてば。」

「危あぶないわ、／＼。おとなしい、其その優やさしい眉まみ毛えを、落おとしたら何どうしませう。」

「其その事ことですかい。」
と、一寸ちよつと止とめた剃かみそり刀あを又また當あてた。

「構かまやしません。」

「あれ、目めの縁ふちはまだしもよ、上うへは止よして、後ご生しやうだから。」

「貴あなた女なの襟えりあし脚すを剃すらうてんだ。何なに、こんなものぐらゐ。」

「あゝ、あゝ／＼、あゝあゝツ」

と便所べんじよの裡なかで屋根やねへ投なげた、筒つゝぬ拔ぬけな大欠伸おほあくび。

「笑わらつちやあ．．．．不可いけない／＼。」

「はゝゝはゝゝ、笑わらつたつて泣ないたつて、何なに、こんな小僧こぞうツ子この眉まゆげ毛けなんか。」

「厭いや、厭いや、厭いや。」

と支膝つきひざのまゝ、する／＼と寄よる衣摺きぬずれが、遠とほくから羽衣はごろもの音おとの近ちかくやうに宗吉そうきちの胸むねに響ひびいた．．．．
疊たぐみの波なみに人魚にんぎよの半身はんしん。

「どんな母さんでせう、このお方。」
雪を欺く腕を空に、甘谷の剃刀の手を支へ、突いて離して、胸へ、抱くやうにして熟と視た。
「羨しい事、まあ、何て、いゝ眉毛だらう。親御は嘸ぞ、お可愛いだらうねえ。」

乳も白々と、優しさと可懐しさが透通るやうに視ながら、衣の綾も衣紋の色も、黒髪も、宗吉の目の眞暗に成つた時、肩に袖をば掛けられて、面を襟に伏せながら、忍び兼ねた胸を絞つて、思はず、ほろ／＼と熱い涙。

お妾が次の室から、
「切れますか剃刀は……あはせに遣らう
／＼と思ひましちやあ……ついね……
……」

自殺をするのに、宗吉は、床屋に持つて行きませう、と言つて、此の剃刀を取つて出た。其は同じ日の夜に入つてからである。

仔細は

六

・ ・ ・ ・ ・ さて、やがて朝湯から三人が戻つて來
ると、長いこと便所に居た熊澤も一座で、又花札を
弄ぶ事に成つて、朝飯は鮓にして、湯豆腐で一吋一
杯、と言ふ。

此の使の次手に、明神の石坂、開化樓裏の、あの
切立の段を下りた宮本町の横小路に、相馬煎餅 ー ー
鹽煎餅の、焼方の、醤油の斑に、何となく轡の形
の浮出して見える名物がある。 ー ー 茶受到しよ

う、是非お千さんにも食いべさしたいと、甘谷の發議。で、宗吉が此を買ひに遣られたのが事の原因であつた。

何分にも、十六七の食盛りが、毎日々々、三度の食事にがつ／＼して居た處へ、朝飯前とたとへにも言ふのが、突落されるやうに峻しい石段を下りたドン底の空腹さひ．．．．天麩羅とも、蕎麥とも、焼芋とも、芬と鹽煎餅の香しさがコンガリと鼻を突いて、袋を持った手がガチ／＼と震ふ。近飢ゑに、冷い汗が垂々と身うちに流れる堪へ難さ。

其の時分の物價で、．．．．忘れもしない七錢が煎餅の可なり嵩のある中から．．．．小判の如く、數二枚。

宗吉は、一坂戻つて、段々に一寸區劃のある、すぐに手を立てたやうに石坂がまた急に成る、平面な處で、銀杏の葉はまだ淺し、樅、榎の梢は遠し、楯に取るべき蔭もなしに、崖の溝端に眞俯向けに成つて、生れてはじめて、許されない禁斷の果を、相馬

の名に負ふ、轡をガリ、と頬張る思ひで、馬の口にかぶりついた。が、甘さと切なさと恥かしさに、堅く成った胸は、自から溝の上へのめつて、折れて、煎餅は口よりも却つて胃の中でポリ／＼と破れた。

ト突出た廂に額を打たれ、忍返の釘に眼を刺され、赫と血とにも總身が熱く、忽爾、罪ある蛇に成つて、攀上る石段は、お七が火の見を駈上つた思ひがして、頭に映す太陽は、血の色して段に流れた。

宗吉は恚くて又明神の御手洗に、更に、氷に閉らるゝ思ひして、悚然と寒氣を感じたのである。

「くす／＼、くす／＼。」
花骨牌の車座の、輪に身を捲かるゝ、危さを感じながら、宗吉が我知らず面を赧めて、煎餅の袋を渡したのは、甘谷の手で。

「おつと来た、めしあがれ。」
と一枚めくつて合せながら、袋をお千さんの手に渡すと、此は少々疲れた風情で、なかまへは入らぬらしい。火鉢を隔てたのが請取つて、膝で覗くやう

にして聞^あけて、

「御馳走様ですね．．．．．早速お毒見。」

と言^いつた。

此に又胸が痛^{いた}んだ。だけなら、まだ然^さはどまでの仔細^{しさい}はなかつた。

「くす／＼、くす／＼。」

宗吉^{そうきち}が此^この座敷^{ざしき}へ入^{はい}りしなに、最^もう其^その忍^{しの}び笑^{わら}ひの聲^{こゑ}が耳^{みみ}に附^ついたのであるが、此^この時^{とき}、お千^{せん}さんの一枚撮^{まいつま}んだ煎餅^{せんべい}を、見^みないやうに、一寸^{ちよつと}傍^{わき}へかはした宗吉^{そうきち}の顔^{かほ}に、横^{よこ}から打撞^{ぶつか}つたのは小皿^{こみち}の平^{へい}四郎^{しろう}．．．．．頬骨^{ほほほね}の張^はつた菱形^{ひしがた}の面^{つら}に、窪^{くぼ}んだ目^めを細^{ほそ}く、小鼻^{こばな}をしかめて、

「くす／＼。」

と又遣^{またや}つた。手^てのわるさに落^おちたと見^みえて札^{ふだ}は持^もたず、鍍金^{めつき}の銀煙管^{ぎんぎせる}を構^{かま}へながら、めりやすの股引^{もひき}を前^{まへ}はだけに片膝^{かたひざ}を立て、居^ゐたのか、其^その膝頭^{ひざがしら}に頬骨^{ほほほね}をたゝき着^つけるやうにして、

「くす／＼くす。」

續^{つづ}けて忍^{しの}び笑^{わら}をしたのである。

立^{たて}續^{つづ}けて、

「くツくツくツ。」

七

「此方は、びきを泣かせて遣れか。」

と黄八丈が骨牌を捲ると、黒縮緬の坊さんが、紅
い裏翻然と翻して、

「餓鬼め。」

と投げた。

「うふ、うふ、うふ。」 と平四郎の忍び笑が、

齒莖を洩れて聲に出る。

「うふ、うふ、うふ、うふ、うふ、うふ。」

「何ぢやい。」 と片手に猪口を取りながら、黒

天鵝絨の蒲團の上に、萩、菖蒲、櫻、牡丹の合戦を、
どろんとした目で見据ゑて居た、大島揃、大胡坐
の熊澤が、ぎよろりと平四郎を見向いて言ふと、笑
ひの蟲は蕃椒を食つたやうに、赤く成るまで赫と競
勢つて、

「うはゝゝは、うふゝ、うふゝ。うふゝ。えツ、
いや、あ、あ、ち、あははゝゝは、はツはツはツは
ツ、テ、ウ、えツ、えツ、えツ、えへゝゝ、うふゝ、
あはゝゝあは、あは、あはゝゝはゝゝ、あ
はゝゝゝ。」

「馬鹿な。」

と唇を横舐めずつて、熊澤がぬつと突出した猪口
に、酌をしようとして、銅壺から抜きかけた銚子の
手を留め、お千さんが、

「何うしたの。」

「おほゝ、や、お尋ねでは恐入るが、あはゝ、テ、
えツ。えへ、えへゝゝ、う、う、ちえツ、堪らない。
あツはツはツはツ。」

「魔が魅したやうだ。」

と甘谷あまやが呆あきれて咳つばく、．．．．と寂然しんと成なる。

寂寞しんと成なると、笑わらばかりが、

「ちやはゝはゝ、う、はゝ、うふ、へゝ、はゝゝ、えへゝゝゝ、えッへ、へゝ、あはゝゝ、うは、うは、うはゝゝ。どッこい、えゝ、ち、ちやはゝ、エ、はゝゝは、はゝゝはゝゝ、うッ、うッ、えへッへッへッ。」

と横よこのめりに平四郎へい、煙管きせるの雁首がんくびで牌腹ひばらを突ついて、身悶みもたえして、

「くッ、苦くるしい．．．．うッ、うッ、うッ

ふゝゝ、ち、うッ、うゝ／＼苦くるしい。あゝ、切せつない、

あはゝはゝ、あはッはッはッ、おゝ、コ、こいつは、

あはゝ、ちやはゝ、テ、ち、たッたッ堪たまらん。

はゝゝ。」

と込こ上げ揉も立て、眞赤まつかに成なつた、七巔てん八倒たうの息繼いきつぎに、つぎ冷さしの茶ちやを取とつて、がぶりと遣やると、

「わッ。」と咽むせて、灰吹はひふきを掴つかんだが間まに合あは

ず、火入ひいれの灰はひへぶツと吐はくと、むら／＼と灰はひかぐら。

「あゝ、あの兒こ、障子しやうじを一枚まい開あけていな。」

と黒縮緬くろちりめんの袖そでで拂はらつて出家しゆつげが言いつた。

宗吉は針の筵を飛上るやうに、其のもう一枚、肘懸窓の障子を開けると、颯と出る灰の吹雪は、すつと蒼空に渡つて、遙に品川の梅に消えた。が、藏前の煙突も、十二階も、睫毛に一眸の北の方、目の下、一雪崩の岨に成つて、岨下の、ごみ／＼した屋根を隔て、日南の煎屋の小さな店が、油障子も覗かれる。

ト斜に、ガツくりと窪んで暗い、岨と石垣の間の、遠く明神の裏の石段に續くのが、大蜈蚣のやうに胸前に蛭つて、突當りに牙を噛合せた如き、小さな黒岨の忍び返の下に、溝から道上つた蛆の、醜い汚い筋をぶる／＼と震はせながら、麸を嘗めるやうな形が、歴然と、自分が瞳に映つた時、宗吉は最早や蒼白に成つた。

此處から認められたに相違ない。

と思ふ平四郎は、涎と一所に、濡らした膝を、手で横撫でしつゝ、

「ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ。」

息と、もに尻を曳いたなごりの笑が、更に、ぐわら

／＼ぐわらと雷の鳴返す如く少年の耳を打つ！

「お煎をめしあがれな。」

目の下の岨が切立てだつたら、宗吉は、お千さんの其の聲とゝもに、倒に落ちて其の場で五體を微塵にしたらう。

産の親を可懐しむまで、眉の一片を庇つてくれた、其の人ばかりに恥かしい。

「一寸、宅まで。」

と息を呑んで言つた。――宅とは露路の其の長屋で。

宗吉は、しかし、其の長屋の前さへ、遁隠れするやうに素通りして、明神の境内の彼方此方、人目の隙の隅々に立つて、飢さへ忘れて、半日を泣いて泣きくらしした。

星も曇つた暗き夜に、

「おかみさん。――床屋へ剃刀を持つて参りませう。次手がございますから………」

宗吉は故と格子戸をそれて、蚯蚓の這ふやうに臺

所^{ころ}から、密^{そつ}と妾^{せふたく}宅^{たく}へおとづれて、家主^{やぬし}の手^てから剃^{かみ}刀^{そり}を取^{とり}つた。

間^まを隔^{へだ}てた座^ざ敷^{しき}に、艶^{あで}やかな影^{かげ}が氣^け勢^{はひ}に映^{うつ}つて、香水^{かうすゐ}の薰^{かをり}は、つとはしり下^{もと}にも薰^{かを}つた。が、寂^{ひつ}寞^{そり}して居^ゐた。

露^ろ路^ぢの長^{なが}屋^やの赤^{あか}い燈^{あかり}に、珍^{めづ}しく、大^{おほ}入^{にふ}道^{だう}やら、五^ぶ分^ぶりやら、中^{なか}にも小^こ皿^{ざら}で禿^{かむろ}なる影^{かげ}法師^{ほふし}が動^{うご}いて、ひそ／＼と聲^{こゑ}の漏^もれるのが、目^めを忍^{しの}び、音^ねを弾^{ひけ}る出^で入^{はひ}りには、宗^{そう}吉^{きち}のために、寧^{むし}ろ僥^{さい}倖^{はひ}だつたのである。

「何をするんですよ、何をするんですよ、お前さん、串戯ではありません。」

社殿の裏なる、空茶店の葦簀の中で、一方の柱に使った片隅なる大木の銀杏の幹に凭掛つて、アハヤ剃刀を咽喉に當てた時すつと音して、瀧縞の袖で抱いたお千さんの姿は、……宗吉の目に、高い樹の梢から颯と下りた、美しい女の顔した不思議な鳥のやうに映つた——

剃刀をもぎ取られて後は、茫然として、殆ど夢心地である。

「まあ！ 可かつた。」

と、身を捻ぢて、肩を抱きつゝ、社の方を片手拝みに、

「蟲が知らしたんだわね。いま、お前さんが臺所で、剃刀を持つて行くつて聲が聞えたでせう。ドキリとしたのよ。」

……奏さんノと言つたけれど、最う居ないでせう。何だかね、こんな間違がありさうな氣がして成らない、私、私、でね、すぐに後から驅出し

其の乳の震が胸に響く。

「何の鹽煎餅の二枚ぐらゐ、貴方が掏摸でも構や
しない。――私はね、あの。……。まあ、
とに角、内へ行きませう。可い鹽梅に誰も居ないか
ら。」

促して、急いで脱放しの駒下駄を捜る時、白脛に
緋が散つた。お千も慌しかつたと見えて、宗吉の穿
物までは心付かず、可恐しい處を遁げるばかりに、
息せいて手を引いたのである。

魔を除け、死神を拂ふ禁厭であらう、明神の御手
洗の水を掬つて、雫ばかり宗吉の頭髪を濡らしたが、
「……。息災、延命、息災延命、學問、學
校、心願成就。」

と、手よりも濡れた瞳を閉ぢて、頸白く、御堂を
ば伏拝み、

「一口めしあがれ、……。氣を靜めて――
私も。」
と柄杓を重げに口にした。

「動悸を御覽なさいよ、私のさ。」
其の胸の轟きは、今より先に知つたのである。

「奏さん、私は貴方を連れて、最う彼處へは戻らない。……身にも命にもかへてね、お手傳をしますがね、……實はね、今明神様に
おわびをして、貴方のお頭を濡らしたのは――
實は、あの、一度内へ歸つてね。……此の
剃刀で、貴方を、そりたての今道心にして、一所に
寝ようと思つたのよ。――あのね、實はね、今
夜あたり紀州のあの坊さんに、私が抱かれて、其處
へ、熊澤だの甘谷だのが踏込むで、不義いたづらの
罪に落さうと言ふ相談に……何うでも、と
言つて乗せられたんです。

……あの坊さんは、高野山とかの、金高な
お寶ものを賣りに出て来て居るんでせう。何處とか
の大金持だの、何省の大臣だのに賣つて遣ると言つ
て、だまして、熊澤が皆質に入れて使つて了つて、
催促される、苦しまぎれに、不斷、何だか私にね、
坊さんが厭味らしい目つきをするのを知つて居て、

まあ大それた美人局だわね。

私が弱いもんだから、身體も度胸もつばぬけて強さうな、あの人をたよりにして、こんな身裁に成つたけれど、……そんな相談をされてからはね……其の上に、此の眉毛を見てからは……

と、お千は密と宗吉の肩を撫でた。

「つく／＼あんな人が可厭に成つた、——
そら、どか／＼と踏込むでせう。貴方を抱いて、ちやんと起きて、居直つて、あいそづかしをきつぱり言つて、夜中に直ぐに飛出して、溜飲を下げて遣らうと思つたけれど……どんな發機で、自棄腹の、彼の人たちの亂暴に、貴方に怪我でもさせた日にや、取返しがつかないから、といま胸に手を置いて、分別をしたんですよ。」

さ、此のまゝ何處かへ行きませう。私に任して安心なさいよ。……貴方も屹とあの人たちに二度とつき合つては不可ません。」

裏^{うらが}岨^{がけ}の石^{いし}段^{だん}を降^おりる時^{とき}、宗^{そう}吉^{きち}は狼^{おほかみ}の峠^{たうげ}を越^こして、
花^{はな}やかな都^{みやこ}を見^みる氣^きがした。

「此^こ處^ゝ．．．．．然^さう．．．．．」
お千^{せん}さんが莞^{にっこり}爾^りして、鹽^{しほ}煎^{せん}餅^{べい}を買^かふのに、晝^{ちう}夜^や帶^{おび}
を抽^ぬいたのが、安^{やす}ものらしい、が、萌^も黄^{えぎ}の金^{かね}入^{いれ}。
「食^たべながら歩^{ある}行^きませう。」

「弱^{よわ}蟲^{むし}だね。」
大^{おほ}通^{とほり}へ抜^ぬける暗^{くら}がり^で、甘^{あま}く、且^かつ香^かしく、皓^{しら}齒^は
でこなしたのを、口^{くち}移^{うつ}し．．．．．

宗吉が夜學から、徒士町のとある裏の、空瓶屋と
檻樓屋の間の、貧しい下宿屋へ歸ると、引傾いだ濡
縁づきの六疊から、男が一人摺違ひに出て行くと、
お千さんは。パツと障子を開けた。が、最う床が取
つてある・・・。

枕元の火鉢に、はかり炭を繼いで、目の破れた金
網を斜に載せて、お千さんが懐紙であふぎながら、
豌豆餅を焼いてくれた。

そして熱いのを口で吹いて、嬉しさうな宗吉に、
浦里の話をした。

お千は、それよりも美しく、雪はなけれど、ちら
／＼と散る花の、小庭の湿地の、石炭殻につもる可
哀さ、痛々しさ。

時次郎でない、頬被したのが、黒塀の外から又ツ
と覗く。

お千が脛白く、はつと立つて、障子をしめようと
する目の前へ、トンと下りると、つか／＼と縁側へ。

「あれ。」

「おい、氣の毒だが一寸用事だ。」

と袖から蛇の首のやうに捕縄をのぞかせた。

膝をなえたやうに支きながら、お千は宗吉を背後

に圍つて、

「……此の人は……」

「いや、小僧に用はない。すぐおいで。」

「宗ちゃん、……朝の御飯はね、煮豆が

買つて蓋ものに、……紅生薑と……

紙の蔽かしてありますよ。」

風俗係は草履を片手に、最う入口の襖を開けて居

た。

お千が穿ものをさがすうちに、風俗係は、内から、

戸の錠をあけたが、軒を出ると、ひたりと腰縄を打

つた。

細腰はふつと消えて、すぼめた肩が、くらがりの

柳に浮く。

……其のお千には、最う疾に、羽織もなく、
下着もなく、膚たゞ白く縞の小袖の萎えたるのみ。

宗吉は、跣足で、めそ／＼泣きながら後を追った。目も心も眞暗で、町も處も覺えない。颯と一條の冷い風が、電燈の細い光に櫻を誘った時である。

「旦那。」

とお千が立停まつて、

「宗ちゃん。ー。宗ちゃん。」

振向きもしないで、うなだれたのが、氣を感じて、眉を優しく振向いた。

「……。」

「姉さんが、魂をあげます。」ー。辿りな

から折つたのである。……懐紙の、白い

折鶴が掌にあつた。

「此の飛ぶ處へ、すぐおいで。」

ほつと吹く息、薄紅に、折鶴は却つて蒼白く、花片にふつと乗つて、ひら／＼と空を舞つて行く。……此が落ちた大な門で、はたして宗吉は拾はれたのであつた。

電車でんしゃが上のぼり下くだりとも殆ほとんど同どう時に來きた。

宗吉そうきちは身動みうごきもしなかつた。

唯見とみると、丸鬚まるまげの女をんなが、其その緋縮緬ひぢりめんの傍そばへ衝つと寄よつて、いつか、肩かたぬげつゝ裏うらへ辻すへつた效性かひしやうのない羽は織りを、上うへから引合ひきあせて遣やりながら、

「さあ、來きました。」

「自動車じどうしゃですか。」

と目めを二みつたまゝ、緋縮緬ひぢりめんの女をんなはきよろんとして居ゐた。

年少い驛員が、

「貴方がたは？」

と言った。

乗り餘つた黒山の群集も、二三輛 立續けに來た
電車が、泥まで綺麗に浚つたのに、まだ待合所を出
なかつた女二人、（別に一人）と宗吉をいぶか
つたのである。

宗吉は言つた。

「此の御婦人が御病氣なんです。」

と、矢張り、けろりと仰向いて居る緋縮緬の女を、
外套の肘で庇つて言つた。

驛員の去つたあとで、

「唯今、自動車を差上げますよ。」

と宗吉は、優しく顔を覗きつゝ、圓鬚の女に瞳を
返して、

「巢鴨はお見合せを願へませんか。．．．．．
屹と御介抱申します。私は恚う云ふものです。」

なふだに醫學博士

――

秦宗吉とあるのを見た

時、……もう一人居た、散切で被布の女が、
P形に直立して、Zの如く敬禮した、此は附添の雜
仕婦であつたが、――博士が、其の従弟の細君
に似たのをよすがに、此より前、圓鬚の女に言を掛
けて、其の人品のゆゑに人をして疑はしめず、連は
品川の某樓の女郎で、氣の狂つたゝめ巢鴨の病院に
送るのだが、自動車で行きたい、それでなければ厭
だと言ふ。其のつもりにして、すかして電車で來
と、此處で自動車でないからと言つて、何でも下り
て、すねたのだと言ふ。……圓鬚は某樓の
其の娘分。女郎の本名をお千と聞くまで、――
此の雜仕婦は物頂面して睨んで居た。

不時の回診に驚いて、或日、其の助手たち、其の
白衣の看護婦たちの、ばら／＼と急いで、然も、靜
肅に驅寄るのを、徐ろに、左右に辭して、醫學博士
秦宗吉氏が、

「いえ、個人で見舞ふのです……皆さん、
何うぞ。」

やがて博士は、特等室に唯一人、膝も胸も、しどけない、けるんとした狂女に、何と・・・・手に剃刀を持たせながら、臥床に跪いて、其の胸に額を埋めて、犇と縋つて、潜然として泣きながら、微笑みながら、身も世も忘れて愚に返つたやうに、だらしなく、涙を髯に傳はらせて居た。

【完】